

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DA0101	看護学研究法特論D	1年/前期	2
担当教員		課程	
伊藤千晴 篠崎恵美子 天野薫 正司孝太郎		博士前期課程	

授業計画詳細
授業目的
<p>研究の基本的なデザインを学び、自立した実践リーダー・管理者・教育者になるために看護の実践や教育の場において専門的な知識・技術の向上、ケアプログラムやケアシステムの改善・開発など実践的研究活動が行われるようにする。国内外の文献で、先行研究のレビューをして、研究の新規性・独創性・社会的価値を考慮した研究テーマと研究目的に合致する研究デザインを選択する。</p> <p>研究の方法として疫学的手法を取り入れた量的研究法、質的研究法、実験的研究法、混合研究法を学び研究の進め方、研究デザインの組み立て方、倫理的配慮と申請方法、データの収集方法、考察、結論の書き方を含めて研究プロセスにおける研究の質管理方法、研究論文作成方法について学修する。</p>
授業内容
<p>基本的な研究方法とその研究プロセスを学習し、同時に研究者の責任（マナー）や倫理的配慮について理解する。研究テーマ・研究目的について社会的ニーズの分析・研究の新規性・独創性・社会的価値・研究倫理を検討する。</p> <p>研究計画書の作成において文献検索（英論文・和論文）から国内外の研究論文を研究方法の妥当性・信頼性を評価する能力を養う。適切な研究データ収集法、研究スケジュールを含めて研究の実施計画、研究過程における研究の量や質を高めるためにデータの管理と解析方法を検討し、具体的で実行可能な研究計画書作成の準備をする。基本的研究方法を量的研究方法と質的研究方法に分け、それぞれにその特徴とプロセスを学習する。学習した基本的研究方法の妥当性・信頼性の見地から、文献クリティークすることを試みる。研究計画発表会に向けて、研究倫理を踏まえた研究計画を検討することができる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 基本的な研究方法と研究プロセスが説明できる。 2. 研究者の責任や倫理的配慮について説明できる。 3. 文献のクリティークの方法について説明できる。 <p>（オムニバス方式／15回 伊藤千晴3回 篠崎恵美子2回 天野薫5回 正司孝太郎5回）</p>
留意事項
<ol style="list-style-type: none"> 1. 英語論文を含む科学的な文献などから情報収集と分析、論理的な文章化が求められる。 2. レポートなどの提出物は期日ごとに提出する。 3. 授業への出席率と授業毎の復習、研究への積極的な取り組み、行動力が求められる。
教材
教科書
各自必要な文献を用いること。そのため、特に教科書は指定しない。
参考書、参考資料等
<ol style="list-style-type: none"> 1. 教員が必要に応じて研究テキスト・研究論文・資料を紹介する。 2. 学生は自己の研究課題に関連した参考文献は自身で検索する。
授業計画（15回）
<ol style="list-style-type: none"> 1 看護研究とは（篠崎） 2 研究方法概論（篠崎） 3 研究倫理（伊藤） 4 量的研究方法（1）：量的研究の特徴とアプローチ（正司） 5 量的研究方法（2）：研究課題、仮説、研究デザイン①（実験）（正司） 6 量的研究方法（3）：研究デザイン②（正司） 7 量的研究方法（4）：研究のプロセス（正司） 8 量的研究方法（5）：量的研究における文献クリティーク（正司） 9 質的研究方法（1）：質的研究の特徴、質的研究のアプローチ（記述民俗学、現象学）（天野） 10 質的研究方法（2）：質的研究のアプローチ（GTA、質的統合法、内容分析）（天野） 11 質的研究方法（3）：質的研究のプロセスと方法（天野） 12 質的研究方法（4）：質的研究の評価基準（天野） 13 質的研究方法（5）：質的研究のクリティーク（学生による発表・討議）（天野） 14 倫理審査申請書・博士論文の書き方、論文構成（伊藤）

15 まとめ（伊藤）				
評価方法				
発表、討議への参加度、レポート 伊藤 20 点 篠崎 10 点 天野 35 点 正司 35 点				
評価基準				
科目の到達目標の到達度により評価 A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good) B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good) C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass) D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 基本的な研究のデザインと研究デザインの基礎を学ぶことができる。				
2. 基本的な研究方法とプロセスが理解できる。				
3. 研究者の責任や倫理的配慮について説明できる。				
4. 研究の課題について国内外の先行研究をレビューし、新規性・独創性・社会的価値のある研究デザインを検討することができる。				
5. 自身の論文作成に結び付けて、倫理的配慮を十分に踏まえた計画書作成の準備ができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DA0201	疫学応用統計学D	1年/後期	2単位
担当教員		課程	
箕浦 哲嗣		博士後期課程	

授業計画詳細				
授業目的				
<p>結果には原因がありますが、実際の現象では原因と結果が一対一に対応しているような単純な例はほとんどありません。様々な要因が重なり合って、一つの事柄を説明しているのが現実です。本講義では、重回帰分析や因子分析をはじめとする多変量解析法を用いて、複雑に絡み合った物事を分かり易く理解する技術および証明する技術を習得することを目標とします。</p>				
授業内容				
<p>多変量解析（重回帰分析、ロジスティック回帰分析、主成分分析、因子分析、パス解析）を中心とした統計分析法を演習形式で講義します。また、自身の研究で参考となる論文を正しく読みこなせるよう、可能な限り毎回、先行研究のPDFファイルを授業支援CMSにアップロードしてください。</p>				
留意事項				
<ol style="list-style-type: none"> 1. 授業に積極的に参加する 2. 授業内容について事前に情報を収集し、必要に応じて分析を試みる 3. 授業内容を自己の研究の計画立案や実践に反映させる 				
教材				
<p>授業支援CMS（担当教員が準備します）よりPDFファイルを事前配布し、授業当日に印刷物を配付します。</p>				
授業計画(15回)				
第1回 実際のデータに対するクリーニング方法、縦持ち入力法、高機能テキストエディタの使い方				
第2回 SPSSの使い方（ケースの選択、値の再割り当て等）				
第3回 SPSSでの独立サンプルの平均値の差の検定、対応サンプルの平均値の差の検定				
第4回 SPSSでの一元配置分散分析と多重比較				
第5回 SPSSでの相関係数の算出と分析、気を付けるべき点				
第6回 SPSSでのクロス集計とカイニ乗検定、イエーツの連続補正、Fisherの直接確率法				
第7回 効果量や検出力などの最近重要視されているパラメータの意味				
第8回 重回帰分析				
第9回 数量化理論I類、ダミー変数の作り方と注意点				
第10回 ロジスティック回帰分析				
第11回 主成分分析				
第12回 探索的因子分析				
第13回 確証的因子分析と既存の尺度				
第14回 共分散構造分析の基礎				
第15回 EZRを使った各種分析と必要サンプル数の算出				
評価方法				
課題レポート 70% 講義に対するアクティビティ 30%				
評価基準				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
データを分析に適した形に加工出来る				
高機能統計ソフトウェアの仕組みを理解する				
算出される数値を適切に理解し、意味を述べる事が出来る				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DB0101	看護教育学特論D	1年/前期	2
担当教員		課程	
篠崎恵美子 伊藤千晴 山口貴子 原好恵		博士後期	

授業計画詳細
授業目的
<p>本課程の目的は、グローバルな視点に立ちながら、研究と実践の相互関係を促す実践科学として看護学の発展に貢献できる自立した研究者、教育者の育成にある。そのため、特論Dでは、看護教育学の教育者・研究者になることを目指して、教育学、教育心理学、学習心理学、社会学、医学、保健学などの看護学周辺諸科学の知見を踏まえつつ、わが国内外の看護教育制度と社会動向を反映させながら授業を進める。</p> <p>具体的には、わが国の社会的・教育的現状を反映した看護教育カリキュラムの開発、看護学教育への教育介入プログラムの作成と評価、看護学実習における教育環境の分析に基づく教育システムの構築、現場の実践活動を効果的にするためのエキスパート看護師に対する教育方策とその評価などの課題の修得による教育方略力や教育評価力を高めること、などを内容とする。こうした課題に関する諸研究を熟読し、クリティクすることにより、自己の独創的な研究計画や博士論文作成に寄与させる。</p>
授業内容
<p>具体的な授業内容</p> <ol style="list-style-type: none"> わが国の看護教育学における教育と研究上の課題を、国内外の看護教育制度と社会動向を反映した教育現状との関連で分析する 看護学教育への教育介入プログラムの作成と評価 わが国の社会的・教育的現状を反映した看護教育カリキュラムの開発—日米比較 体験学習理論を背景にした看護学教育授業展開における教育介入プログラムとの作成と評価法 看護学実習における教育環境の分析に基づく教育システムの構築 看護学教育プログラムの開発による教育介入研究や評価研究などについての修得によって、自己の研究計画にどのように活用するのかについて討議する (オムニバス方式/全15回)
留意事項
<ol style="list-style-type: none"> 授業に積極的参加を期待する。 授業の課題について事前に情報収集と必要に応じて分析を試みる。 授業の中で自己の研究計画と実践力強化に反映させる。
教材
必要に応じて適宜使用。
授業計画 (15回)
<p>授業はオムニバス方式により、下記の内容で、講義・討議を進める。</p> <ol style="list-style-type: none"> 2 わが国の看護教育学における教育と研究上の課題を、国内外の看護教育制度と社会動向を反映した教育現状との関連で分析する (篠崎恵美子/2回) 4 看護学教育への教育介入プログラムの作成と評価 (篠崎恵美子/2回) 6 わが国の社会的・教育的現状を反映した看護教育カリキュラムの開発—日米比較 (篠崎恵美子/2回) 9 体験学習理論を背景にした看護学教育授業展開における教育介入プログラムとの作成と評価法 (山口貴子/3回) 10-12 看護学実習における教育環境の分析に基づく教育システムの構築 (原好恵/3回) 13-15 看護学教育プログラムの開発による教育介入研究や評価研究などの修得によって、自己の研究計画にどのように活用するのかについての討議とまとめ

評価方法				
1. 授業中の質疑・討議40% 2. 情報収集・分析30% 3. 課題に関する資料作成と発表30%				
評価基準				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 看護学教育における研究上の課題を、教育現状との関連で分析できる。				
2. アセスメント能力を高める教育介入研究のプロセスを理解し、分析できる。				
3. 看護学生の実習環境システム研究を分析して、教育指導の在り方を検討することができる。				
4. 体験学習理論に基づき、教育介入プロセスを理解し分析できる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DB0201	看護教育学演習D	1年/通年	2
担当教員		課程	
篠崎恵美子 伊藤千晴 山口貴子 原好恵		博士後期	

授業計画詳細
授業目的
看護教育学や看護の基盤となる基礎看護領域の構成概念・理論・モデルを創造することに貢献する教育力・研究力を高めることを目的とする。そのために、概念分析、国内外の文献検討を修得し、具体的な研究例を用いて、教育介入研究、教育評価研究、ケアアウトカム測定尺度の開発、教育プログラム及び教育システムの開発とその検証などについて論理的に理解し、自己の研究計画や論文作成に活用させる。
授業内容
本演習では、以下の内容を扱うものである。 国内外のシステムティックレビューおよび文献検討と概念分析に関する基礎理解をする。 国内外の諸看護教育学研究の理論生成過程の分析や教育介入研究について、国内外の文献検討をして、クリティークと研究テーマの概念分析をするために、以下を理解するものとする (オムニバス方式/30回)
留意事項
1. 授業に積極的参加を期待する。 2. 授業の課題について事前に情報収集と必要に応じて分析を試みる。 3. 授業の中で自己の研究計画と実践力強化に反映させる。
教材
1. 各教員により研究論文を中心に適宜使用。 2. 参考図書： 1) 杉森みどり・舟島なをみ(2012). 看護教育学 第5版, 医学書院. 2) Kolb, D. A. (1984). <i>Experiential Learning: Experience as the Source of Learning and Development</i> , Prentice-hall, New Jersey. 3) 小笠原知枝・松木光子編(2012). <i>これからの看護研究—基礎と応用</i> 第3版
授業計画 (15回)
1-3 システムティックレビューおよび文献検討と概念分析に関する基礎理解 (篠崎恵美子/3回)
4-9 看護学教育への教育介入研究(教育プログラムの開発を含む)に関する文献検討と概念分析： ・看護アセスメント領域、対人関係看護介入領域における教育プログラムの開発とその検証 (篠崎恵美子/6回)
10-12 看護学教育への教育介入研究(教育プログラムの開発を含む)に関する文献検討と概念分析： ・倫理的態度領域における教育プログラムの開発とその検証 (伊藤千晴/3回)
13-15 正確な臨床判断力を高めるための思考過程の分析と教育プログラムの開発 (篠崎恵美子/3回)
16-20 看護学教育の教育評価研究(測定尺度の開発を含む)に関する文献検討と概念分析 (篠崎恵美子/5回)
21-23 教育システムの開発とその検証などにおける文献検討と概念分析 (原好恵/4回)
24-29 実習指導と実習環境間の教育システムの開発に関する文献検討と概念分析 (山口貴子/5回)
30 まとめ：研究と実践の相互関係的な発展をめざした研究例を通して、どのように自己の研究計画に活用

評価方法				
1. 授業中の質疑・討議40% 2. 情報収集・分析30% 3. 課題に関する資料作成と発表30%				
評価基準				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 文献検討と概念分析について理解し、その意義を説明できる。				
2. アセスメント能力育成を目的とした教育介入研究のための文献検討に基づく概念分析ができる。				
3. 倫理的態度育成のための教育介入研究に関する文献検討に基づく概念分析ができる。				
4. 臨床実習環境、実習指導と実習評価の文献検討に基づく概念分析ができる。				
5. 教育評価尺度の開発に関する文献検討に基づく概念分析ができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DB9101	看護教育管理学特別研究D I	1年/通年	2
担当教員		課程	
篠崎恵美子、伊藤千晴、山口貴子、原好恵		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本研究では、看護教育と看護管理の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む看護教育学と看護管理学の領域を看護教育管理学看護学分野としている。その2つの領域での分野は国内外で研究を広げ革新的なケアプログラムの開発やケアシステムの開発を行う。</p> <p>またグローバルな研究によって専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になるために特別研究D Iでは適切で実行可能な研究計画書を作成するために計画発表会で発表し、研究計画審査の準備を目指す。</p>
<p>授業内容</p> <p>本授業内容は、看護の質保証を重視して専門性の高い看護を行うための科学的な知見を明らかにしていく。看護の現象をより、とらえやすい諸要素に分解し、それらの要素間にどのような関連があるのかについての枠組みを明確化し、看護の実践に有用な研究を国内外の文献を通して幅広く行う。研究は分野の広い視点を基盤として2つの領域のいずれかについて深める。看護教育学では看護の改善・改革のために、教育プログラムの開発、これに基づく教育介入研究、教育システムの構築を行う。看護管理学は臨床現場での看護管理実践やヘルスケアシステムの改善などについて取り組む。研究の過程を理解し、研究計画書を作成する。研究計画書には研究タイトル、研究動機、研究背景、研究対象、研究枠組みなど、研究の意義（研究の新規性・独創性・看護における意義、社会的価値）、研究デザイン、データ収集法、分析方法、研究の精度を保つ質管理方法、倫理的配慮などを加え、研究計画書を完成する。看護教育学領域では看護教育者として、国際的視点を視野に入れた看護教育学の教育プログラムの開発、看護教育介入方法、教育システムの構築、教育評価、実習評価、看護介入アウトカムのための測定尺度の開発と看護理論モデルについて広く研究に取り組む。</p> <p>(篠崎恵美子)</p> <p>研究テーマはさらに国際的に見地を深め、アセスメント能力と対人関係能力の育成のための教育プログラムの開発と教育介入研究を探求する。</p> <p>(伊藤千晴)</p> <p>研究テーマはさらに国際的に見地を深め、倫理的態度育成のための教育プログラムの開発と教育介入研究である。</p>
<p>留意事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国内外の文献などから情報収集を行い、レビューを作成する。 2. 授業への出席率と研究への積極的な取り組みが求められる。 3. レポートなどの提出物と発表資料は期日ごとに提出する。
<p>教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。
<p>授業計画 (30回)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1-6 看護教育管理学分野の個人に対して講義・演習・討論形式で授業展開：共通性が高く有用な研究課題と手法の代表的な研究例などを用いて下記のプロセスに沿って授業展開を行う。 7-8 原著水準の副論文1件以上（学術誌の原著論文として採用される）と博士（看護学）学位論文の完成を目指す条件の確認 9-11 研究テーマと目的を決定：自己の関連研究において国内外文献のクリティークを行い、研究テーマ・研究目的を検討し、研究に関する社会的ニーズの分析・研究の新規性、独創性・社会的価値・研究倫理を明確にする。

12-14 研究デザインの選定、論文レポートと研究方法の適切性・妥当性を具体的に検討				
15-16 研究目的を達成するために実行可能なデータ収集法を選択				
17-19 データ分析法の選択				
20-21 研究プロセスにおいて研究の精度を保つ質管理方法				
22-26 研究計画書を作成				
27-28 看護学研究科委員会による学生と教員参加の「発表会」において適切な準備の上で発表・討論				
29-30 発表した研究計画の評価に基づいて修正し、研究計画書を完成				
評価方法				
研究計画書の作成 80% 発表 20%				
評価基準				
科目の到達目標の到達度により評価				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 学術誌での原著論文の水準を確認できる				
2. 研究テーマと目的について社会的ニーズの分析・研究の新規性・独創性・社会的価値・研究倫理を明確にし、研究テーマと目的を決定させる				
3. 適切な研究デザインを選択し、研究の具体的な方法を決定できる				
4. 研究データ収集方法の具体化とデータ分析方法を決定できる				
5. 研究プロセスにおける質管理方法を理解し活用できる				
6. 「発表会」に適切な準備の上で発表し、評価が受けられる				
7. 看護実践の改善、変革または政策への提言のために新しい知見が得られる研究計画書を完成させる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DB9201	看護教育管理学特別研究DⅡ	2年/通年	2
担当教員		課程	
篠崎恵美子、伊藤千晴、山口貴子、原好恵		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本科目では、看護教育と看護管理の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のために独創性と新規性の高い実践的研究に取り組む。看護教育管理学分野において実践科学として学問的発展に貢献できるようになるために研究を行う。看護教育管理学分野の教員が指導をする。専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になるために、本科目の目的は特別研究DⅡで準備をした研究計画の審査に合格し、倫理委員会に提出する。また、計画に沿って研究を進め、中間発表会Ⅰで発表する。副論文を学術誌に投稿することを目指して研究をすすめる。</p>
<p>授業内容</p> <p>本授業内容は、分析において国際的視点で教育プログラム開発やシステム開発、または、看護保健管理学の研究テーマに沿って、現場の看護マネジメントの視点から看護実践の改善・変革のための提案ができる研究を行う。看護教育管理学に関する研究計画に沿って研究を進める。</p> <p>①研究データの収集 ②データの分析 ③精度の高い結果を導き、その解釈、妥当性を検討 ④十分な文献による考察、結論を導く。 ⑤「発表会」で評価を得て論文を修正、博士論文の全体的な計画を実行しながら論文を完成する。 ⑥学術誌に投稿する。</p> <p>看護教育学領域では看護教育者として、国際的視点の視野に入れた看護教育学の教育プログラムの開発、看護教育介入方法、教育システムの構築、教育評価、実習評価、看護介入アウトカムのための測定尺度の開発と看護理論モデルについて広く研究に取り組む。</p> <p>(篠崎恵美子) 研究テーマはアセスメント能力と対人関係能力の育成のための教育プログラムの開発と教育介入研究。</p> <p>(伊藤千晴) 倫理的態度育成のための教育プログラムの開発と教育介入研究</p>
<p>留意事項</p> <p>研究の推進、データの収集・分析、データ分析内容に即した副論文の作成、学会発表、学内中間発表の発表内容の精度、内容、評価</p>
<p>教材</p> <p>・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。</p>
<p>授業計画 (15回)</p> <p>1-2 特別研究Ⅰの研究計画について、研究倫理審査委員会の承認を得て、研究計画に沿って研究の実施準備 3-6 研究の精度を保つ方法でデータを収集 7-11 効率的なデータ入力方法、適切なデータ分析方法によって、研究結果について信頼性と妥当性を検討して図、表を加えて文章化 12-16 研究結果に基づいて、副論文について適切な考察と結論を導き論理的にまとめる 17-23 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討 24-25 「発表会」において適切な準備の上で発表・討論 26-30 論文の中間発表会の評価に基づいて論文の修正、学術誌に投稿</p>
<p>評価方法</p>

倫理審査の承認 60% 研究の実施 20% 成果発表 20%				
評価基準				
科目の到達目標の到達度により評価				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 研究計画の審査に合格することができる				
2. 倫理審査申請書を提出し、承認を得ることができる				
3. 本研究を国際的な研究動向に位置づけて研究を進めることができる				
4. 研究計画に基づいて適切なデータ分析方法によって分析ができる。				
5. 分析結果に基づいて考察と結論を適切に導くことができる。				
6. 研究目的から結論まで論旨一貫性を検討確認できる。				
7. 論文の中間発表会 I で発表し、質疑に適切に対応できる。				
8. 博士（看護学）学位論文に関連する副論文の学術誌を目指して研究を進めることができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DB9301	看護教育管理学特別研究DⅢ	3年/通年	2
担当教員		課程	
篠崎恵美子、伊藤千晴、山口貴子、原好恵		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本研究では、看護教育・看護保健管理の質保証をめざして、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む看護教育学と看護保健管理学の領域を看護教育管理学分野としている。その2つの領域での広い分野でいずれかについても深め、革新的なケアプログラムの開発やケアシステムの開発などを行う。グローバルな研究によって専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になることをめざす。特別研究DⅢの目的は、独創性があり先駆的な論文を作成することである。そのために国際学会での発表、副論文の学術誌への掲載、中間発表会Ⅱでの発表、博士論文予備審査を経て、博士本論文を期限内に提出することを目指す。</p>
<p>授業内容</p> <p>特別研究DⅢでは、以下のプロセスに沿って授業展開を行う。</p> <p>特別研究Ⅰ・Ⅱの内容水準と研究プロセスを経て博士学位論文の予備審査に合格した後、本論文の博士（看護学）学位論文を完成させ、その最終審査に合格することである。</p> <p>特別研究DⅡの研究経過に基づいて、研究結果を見直し、適切な考察と結論を導きまとめる。研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討、「博士（看護学）学位論文中間発表会（2回目）、研究科委員会において論文審査委員（3名）の口答試問による予備審査に合格し、論文の最終審査に合格できるようにする。</p> <p>看護教育学領域では看護教育者として、国際的視点を視野に入れた看護教育学の教育プログラムの開発、看護教育介入方法、教育システムの構築、教育評価、実習評価、看護介入アウトカムのための測定尺度の開発と看護理論モデルについて広く研究に取り組む。</p> <p>（篠崎恵美子） 研究テーマはアセスメント能力と対人関係能力の育成のための教育プログラムの開発と教育介入研究</p> <p>（伊藤千晴） 倫理的態度育成のための教育プログラムの開発と教育介入研究</p> <p>（篠崎恵美子 伊藤千晴） 学生の研究テーマに沿って研究の集大成として特別研究DⅢでは、独創性があり、先駆的な論文（例えば、看護教育学では患者や家族をサポートする看護学生に対人関係能力育成の教育プログラムの開発など）を作成する。</p>
<p>留意事項</p> <p>1) 現場志向型研究の過程と方法を修得する。 2) 論理的・分析的思考に基づいた論文作成 3) 期日までに論文を仕上げる</p>
<p>教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。
<p>授業計画 (30回)</p> <p>1-5 グループと個人に対して講義・演習・討論形式で授業展開 1-6 特別研究DⅡの研究経過に基づいてさらに研究結果を見直し、適切な考察と結論を記述 7-14 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討 15-20 研究科委員会が開催する学生と教員参加による「論文発表」において適切な準備の上で発表・討論 21-30 発表した論文の評価に基づいて修正 独創性・新規性のある論文を作成し、原著論文として投稿</p>
<p>評価方法</p>

博士論文の作成 70% 研究成果の発表 30%				
評価基準				
<p>独創性があり先駆的な原著論文を作成する。</p> <p>A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good)</p> <p>B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)</p> <p>C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)</p> <p>D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)</p>				
到達目標	A	B	C	D
1. 博士論文の作成に向けて研究を進めることができる。				
2. 学術集会への発表など研究成果を報告することができる。				
3. 研究成果として独創性・新規性・社会的価値について述べるすることができる。				
4. 独立した研究者としての能力を備え、幅広く深い知識を基盤としたさらなる研究を展開することができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG2101	生涯発達看護学特論 D	1年/前期	2
担当教員		課程	
山根友絵 宮田延実 深谷久子		博士後期課程	

授業計画詳細
授業目的
人間の生涯発達に関する諸理論の変遷を概観し、重要と考えられる理論の分析、関連領域の研究のクリティークを行い、生涯発達看護学領域における研究の動向と課題、および変化する社会への役割を追究し、新たな生涯発達看護学の方向性を探究する。
授業内容
人間の生涯発達に関わる諸要因、ケアの課題、ケアシステムのあり方など、生涯看護学領域の課題を明らかにし、生涯発達看護学におけるあらゆる側面からヘルスケアシステムの構築、技術開発、健康問題解決などに向けた研究方法が理解できる。また、グローバルで学際的な視点をもち国内外の生涯発達看護学に関する保健・医療・福祉分野の諸問題や、世界の動きに注目し、国際的な看護関係学会の知見をとおして関連領域の研究成果を深め、研究の進め方の概要を理解する。
1. 生涯発達に関する概念／理論の探究 2. 関連領域の保健政策と医療・看護の現状、および対象とその家族へのケアシステム体制と看護の専門性の検討 3. 対象の課題解決とケアの質的向上に向けた理論的背景の理解、課題達成のための分析方法、アウトカム測定方法、ケアプログラムの開発、システム構築の方法の概観 4. 1) 生涯発達看護学領域の研究のクリティーク、関心ある現象に対する研究デザインの選択 2) 国際学会の知見や関連領域の研究成果の検討 3) 研究課題の明確化
留意事項
各課題のレポート作成、発表、討論への参加、自己の研究課題解決に向けた関連図書および学術研究報告書などの文献的考察などを行う。
教材
必要に応じて文献、論文などは、その都度提示する。
授業計画 (15回)
1-2 人間の生涯発達に関する諸理論について看護への適用と研究上の課題 (深谷久子) 3-5 関連領域の保健政策と医療・看護の現状、および対象とその家族へのケアシステム体制と看護の専門性の検討 (深谷久子) 6-10 対象の課題解決とケアの質的向上に向けた理論的背景の理解、課題達成のための分析方法、アウトカム測定方法、ケアプログラムの開発、システム構築の方法の理解 (宮田延実) 11-15 生涯発達看護学領域の研究のクリティーク、関心ある現象に対する研究デザインの選択 (山根友絵) 国際的な視野を踏まえた関連学会の知見や関連領域の研究成果の検討を行う 研究課題の明確化 対象の健康に関わる諸要因、ケアの課題、ケアシステムのあり方などの課題が明らかにできる。
評価基準
問題・課題の発見、専門書および論文の選択と内容の理解、討論・プレゼンテーション内容、レポート内容などから総合的に評価する。

- A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good)
 B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)
 C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)
 D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)

到達目標	A	B	C	D
1. 生涯発達看護学領域における保健・医療政策と現状について、論じることができる。				
2. 生涯発達を遂げる対象への看護の諸問題、対象とその家族へのケアシステムと看護の専門性の検討ができる。				
3. 生涯発達の視点からヘルスケアシステムの構築、技術開発、健康問題解決等に向けた研究の方法が理解できる。				
4. 生涯発達を遂げる対象の健康に関わる諸要因、ケアの課題、ケアシステムのあり方など、生涯発達看護学領域の課題を明らかにし、検討できる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG2201	生涯発達看護学演習 D	1年/通年	2
担当教員		課程	
山根友絵 宮田延実 深谷久子		博士後期課程	

授業計画詳細
授業目的
生涯発達を遂げる対象への新たな介入の創造と開発を目標に、他学問分野の方法論をも加味して関連領域研究のクリティークを行う。対象のQOLの向上やセルフケアの向上、ケアシステムの質的向上を目指し、顕在的・潜在的な健康課題や問題解決のために必要な看護学理論や方法論・技法の開発に繋げることをねらいとする。
授業内容
理論の構築、看護方法論の開発ができる能力を培うように、生涯発達看護領域の学問的・社会的・国際的な研究に関してさらに演習で深める。生涯発達を遂げる対象への新たな介入の創造と開発を目標に、他学問分野の方法論をも加味して関連領域研究のクリティークを行う。対象のQOLの向上やセルフケアの向上、ケアシステムの質的向上をめざし、顕在的・潜在的な健康課題や問題解決のために必要な看護学理論や方法論・技法の開発に繋げることをねらいとする。世界的な健康問題と対策などの広い視野をもち、生涯発達看護学における研究課題について、文献レビュー、課題の明確化、研究方法に関する演習を行い、研究課題の探求・進め方の基盤となるようにする。
1. 関連領域の研究の国内外の文献検討後、諸問題と将来展望を考察。生涯発達看護学における今日的課題に関連する文献の検索とクリティーク、および新規性のある研究課題の検討、方法論の選択。(16回)
2. 既存文献の検討から新規性のある研究課題と方法論の整理・決定、妥当性の理論的説明、研究計画書の草案作成、フィールドワーク。(7回)
3. 研究課題の方法論とその実現可能性の検討、倫理的な妥当性をふまえた研究計画書の作成、生涯発達看護学領域における研究課題の重要性・新規性・学術的意義の明確化。(7回)
留意事項
各課題のレポート作成、発表、討論への参加、研究課題の関連図書及び学術研究報告書などの文献的考察などを行う。
教材
必要に応じて文献、論文などは、その都度提示する。
授業計画 (30回)
1-16 生涯発達看護学に関する研究の国内外の文献検討後、諸問題や国際活動の将来展望を考察する。 次に、生涯発達看護学領域における今日的問題を踏まえ、必要な看護学理論や方法論・技法の追求・構築のための研究課題、および学生の志向する課題に関連する文献の検索とクリティークを行う中から、新規性のある研究課題を検討し、方法論の選択を行う。特に、健康に関わる諸要因、ケアの課題、ヘルスケアシステムの構築、知識・技術開発、健康問題解決等に向けた研究は実証的に探究、クリティークを行う。
17-23 既存文献の検討から新規性のある研究課題と方法を決定する。研究課題と方法論を整理し、妥当性を理論的に説明する。研究計画書の草案を作成する。本研究課題の概念／理論の探究・分析・展開などについてフィールド演習を行う。
24-30 研究課題を決定し、方法論とその実現可能性を検討し、倫理的な妥当性を踏まえて研究計画書の作成を行う。生涯発達看護学領域における本研究課題の重要性・新規性を明確にする。
評価基準
文献レビュー、課題の明確化、研究方法の内容、討論・プレゼンテーション内容、レポート内容等から総合的に評価する。

- A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good)
 B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)
 C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)
 D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)

到達目標	A	B	C	D
1. 関心のあるテーマについての文献検討から、課題を明確にできる。				
2. 文献検討の発表・討議を通して、対象への支援のための方法論を追究できる。				
3. 文献検討で得られた示唆を基に、対象と社会に寄与することのできる知見や技術を探究し、看護実践モデルや生涯発達を遂げる対象への看護の質を向上させる研究への適用について考究できる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG4101	エンド・オブ・ライフケア看護学特論D	1年/前期	2単位
担当教員		課程	
天野 薫		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本学の博士課程が目指す看護人材像（教育目的）は、グローバルな視点を持って学問的発展に貢献できる活動的・創造的で自立した研究者と教育者の育成である。そのため、エンドオブライフケア看護学では、海外の終末期ケアやがん看護領域の研究で生成された理論・概念・モデルを基盤に、わが国の社会的・文化的背景を考慮したエンドオブライフケア看護学を探究する。さらに、がんあるいは非がんの対象者のエンドオブライフ期を生きる人々のQOLを高めることに貢献できる研究力を育成する。</p> <p>そこで、エンドオブライフケア看護学特論Dでは、エンド・オブ・ライフケアに関連する研究を発展させていくために、エンドオブライフ期を生きる人々を巡る国内外の制度、ケアシステム、研究動向を理解し、わが国の医療制度・エンドオブライフケア研究に関する課題を分析する。エンドオブライフケアの発展に向けて、実践的研究からエビデンスを分析し、新たな知識や理論の構築のプロセスを理解する。さらに、本特論Dでは、看護学関連の学問領域で得られた知見と海外のエンドオブライフケアの質評価に関する先行研究を基盤に、エンドオブライフケアの特徴、ケアシステムやその評価方法、ケアの質管理方法を学修することによって、各自の研究課題に反映させる。</p>
<p>授業内容</p> <p>上記目標達成に向け、以下のとおり学修する。授業は、講義、学生による文献検討を中心としたプレゼンテーション、グループディスカッションにより進める。</p> <p>がん看護領域のエンド・オブ・ライフケアだけでなく、非がんのエンド・オブ・ライフケアについて学修する。また病棟・ホスピス・施設・在宅などのさまざまな療養環境におけるエンド・オブ・ライフケアについて授業を展開する。</p> <p>授業内容には、1) 諸外国におけるエンド・オブ・ライフケア制度、ケアシステムの実態との比較・分析したわが国のエンドオブライフ期を生きる人々を巡る課題、2) エンドオブライフ期にある人々と家族の療養環境のアセスメントとケア評価、3) エンドオブライフ期にある人々と家族のDying Careと看取りケアにおける諸外国との比較、4) 看護学関連の学問領域で得られた知見と海外のエンドオブライフケアの質評価に関する先行研究などを含む。</p> <p>(全15回)</p> <p>(4回) エンドオブライフ患者と家族のエンド・オブ・ライフケアにおける諸外国との比較、Death & Dying Care, Spiritual Care, Grief & Mourning careなどのケアリングに関与する諸要因</p> <p>(2回) エンドオブライフ患者と家族のケアシステムとその評価方法</p> <p>(2回) エンドオブライフ患者へのケア介入研究とケアシステム開発</p> <p>(2回) 諸外国におけるエンド・オブ・ライフケア制度、ケアシステムの実態と研究の動向から分析したわが国の課題</p> <p>(2回) エンド・オブ・ライフケア患者と家族の療養環境のアセスメントとケア評価</p> <p>(2回) 測定尺度の開発と緩和ケアに対するエンド・オブ・ライフケア評価</p> <p>(1回) まとめ</p> <p>エンド・オブ・ライフケア看護学特論Dで修得した内容と各自の研究課題に関連づけた討議とレポート</p>
<p>留意事項</p> <p>1. 授業に主体的参加を期待する。</p> <p>2. 授業の課題について事前に情報収集・分析をする。</p> <p>3. 自己の実践力強化と研究計画に反映させる。</p> <p>なお、本科目の単位習得には、授業時間以外に文献研究、発表準備等、およそ授業時間の2倍程度の自己学習を要します。</p>
<p>教材</p> <p>必要に応じてその都度、提示配布する。</p> <p>教科書</p>

1. 谷本真理子・増島麻里子編 (2022) : エンドオブライフケア, 南江堂				
参考図書				
1. 小笠原知枝編 (2018) 「エンド・オブ・ライフケア看護学 - 基礎と実践 -」ニューヴェルヒロカワ出版				
2. 小笠原知枝・松木光子編 (2012) これからの看護研究 基礎と応用 第3版、ニューヴェルヒロカワ出版				
3. 小笠原知枝・久米弥寿子 (2000) ターミナル期にあるがん患者の痛み管理とサポートケアを妨害する諸因子の抽出とその対策 (日米比較研究を含む) 平成9~11年度科学研究費補助金報告書				
4. G. Ogasawara, Y. Kume and M. Andouh (2003) Family Satisfaction with Perception of and Barriers to Terminal Care in Japan, Oncology Nursing Forum 30(5) : E100-105.				
5. 島内節、内田陽子 (2014) 「在宅におけるエンド・オブ・ライフケア実践書ー死を迎える人の人生の質・価値を高めるために」ミネルヴァ書房				
6. 内田陽子、島内節編 (2014) 「施設におけるエンド・オブ・ライフケア実践書ー死を迎える人に人生の質・価値を高めるために」ミネルヴァ書房				
7. 島内節、葉袋淳子 (2008) 「在宅エンド・オブ・ライフケア利用者アウトカムと専門職の実践力を高めるケアプログラムの応用」イニシア?				
8. 島内節、友安直子、内田陽子 (2002) 「在宅ケアーアウトカム評価と質改善の方法」医学書院				
授業計画 (15回)				
1-2 諸外国におけるエンド・オブ・ライフケア制度、ケアシステムの実態と研究の動向から分析したわが国の課題 (2回)				
以下3-14回では、下記のテーマに関する実践的研究から新たな知識や理論の構築のプロセスについて理解する。				
3-4 エンド・オブ・ライフケア患者と家族の生活環境のアセスメントとケア評価 (2回)				
5-6 エンドオブライフ患者と家族のエンド・オブ・ライフケアにおける諸外国との比較 (2回)				
7-8 Total Painの測定尺度の開発と緩和ケアに対するエンド・オブ・ライフケア評価 (2回)				
9-10 Death & Dying Care, Spiritual Care, Grief & Mourning careなどのケアリングに関与する諸要因 (2回)				
11-12 エンドオブライフ患者へのケア介入研究とケアシステム開発 (2回)				
13-14 エンドオブライフ患者と家族のケアシステムとその評価方法 (2回)				
15 まとめ				
エンド・オブ・ライフケア看護学特論Dで修得した内容と各自の研究課題に関連づけた討議とレポート (1回)				
評価方法				
1. 授業中の質疑・討議40% 2. 情報収集・分析30% 3. 課題に関する資料作成と発表30%				
評価基準				
A (100~80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79~70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69~60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. エンド・オブ・ライフケア看護学領域における主要な概念構造や理論について説明することができる。				
2. エンド・オブ・ライフケアに関する看護理論の生成過程と、看護研究と実践との関連性について説明できる。				
3. 海外におけるエンド・オブ・ライフケアにおける緩和ケアの実践と評価方法を理解し、わが国での活用の可能性を検討できる。				
4. 終末期患者と家族のニーズと支援の実態および研究例を分析することができる。				
5. エンド・オブ・ライフケアの評価指標の開発とケアシステムのモデル開発例を分析し、クリティークすることができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG4201	エンド・オブ・ライフケア看護学演習D	1年/通年	2
担当教員		課程	
天野 薫		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本学の博士課程が目指す看護人材像（教育目的）は、グローバルな視点を持って学問的発展に貢献できる活動的創造的で自立した研究者と教育者の育成である。そのため、海外の終末期ケア学研究とがん看護学研究に基づく生成された理論・概念・モデルを探求する。さらに終末期におけるがん・非がんのあらゆる対象者の心身のニーズの対応、家族支援を含めた終末期患者のQOLを高めるケアリングのための研究力、教育力を促す。</p> <p>本演習Dでは、さまざまな学問領域の研究成果を参考文献にして、ケアの質管理方法を明確にししながら、がん患者の緩和ケアのチームケアとどうか評価方法、スピリチュアルケア、在宅エンドオブライフの経過時期別ニーズの変化、介入研究とその評価方法、教育実践プログラムと有効性検証などについてシステムティック・レビューや概念分析を行う。また実践例でのケア展開と文献検討を行って、看護研究と実践との相互発展を促進する研究の進め方を理解し、自己の研究プロセス（テーマ設定・研究計画・研究実施・論文作成）に反映させる。</p>
<p>授業内容</p> <p>本演習では、以下の内容を扱うものである。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. システムティック・レビューと概念分析に関する基礎理解をする。 国内外のエンドオブライフケア研究の理論生成過程の分析や介入研究について、システムティック・レビューをして、クリティークと研究テーマの概念分析をするために、以下を理解するものとする。 2. がん患者の症状緩和ケア介入プログラムの開発と効果評価に関するシステムティック・レビューと概念分析 3. システムティック・レビューと概念分析 4. エンドオブライフ期にある人々とその家族のDying Careと看取ケアを効果的に行うためのエキスパートナースに対する教育介入プログラムの開発とその評価研究に関するシステムティック・レビューと概念分析 5. スピリチュアルケアの日米比較研究に関するシステムティック・レビューと概念分析 6. 在宅エンドオブライフの経過時期別ニーズの変化とケアパス開発とその有効性検証に関するシステムティック・レビューと概念分析 <p>（全30回）</p> <p>（9回）システムティック・レビューと概念分析方法の修得、エンド・オブ・ライフケアの実践教育プログラムの開発とその有効性検証</p> <p>（4回）在宅エンドオブライフの経過時期別ニーズの変化とケアパス開発によるケア評価方法</p> <p>（3回）がん患者の家族のグリーフケアと効果評価研究</p> <p>（4回）がん患者の症状緩和ケア介入プログラムの開発とその効果評価方法</p> <p>（4回）エンドオブライフ期にある人々とその家族のDying Careと看取ケアを効果的に行うためのエキスパートナースに対する教育介入プログラムの開発とその評価研究</p> <p>（2回）まとめ：学生のレポート発表と討論「看護の開発的研究と実践の相互的発展を促す研究の進め方」</p>
<p>留意事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 授業に積極的参加を期待する。 2. 授業の課題について事前に情報収集・分析をする。 3. 自己の実践力強化と研究計画に反映させる。 <p>なお、本科目の単位習得には、授業時間以外に文献研究、発表準備等、およそ授業時間の2倍程度の自己学習を要します。</p>
<p>教材</p> <p>必要に応じてその都度、提示配布する。</p> <p>教科書</p>

<p>1. 小笠原知枝編 (2018) 「エンド・オブ・ライフケア看護学 - 基礎と実践 - 」ニューヴェルヒロカワ出版</p> <p>参考図書</p> <p>1. 小笠原知枝・松木光子編 (2012) 「これからの看護研究 基礎と応用 第3版」ニューヴェルヒロカワ出版</p> <p>2. 松木光子・小笠原知枝・久米弥寿子編 (2006) 「看護理論 理論と実践のリンケージ」ニューヴェルヒロカワ出版</p> <p>3. 小笠原知枝・久米弥寿子編 (2000) 日本における末期乳がん患者の看護診断と看護介入：異なる入院目的による比較 Journal of Nursing Terminologies and Classification 16 (3～4) : 54～64</p> <p>4. 島内節・内田陽子 (2014) 「在宅におけるエンド・オブ・ライフケア実践書－死を迎える人の人生の質・価値を高めるために」ミネルヴァ書房</p> <p>5. 内田陽子・島内節編 (2014) 「施設におけるエンド・オブ・ライフケア実践書－死を迎える人生の質・価値を高めるために」ミネルヴァ書房</p> <p>6. 島内節・葉袋淳子 (2008) 「在宅エンド・オブ・ライフケア利用者アウトカムと専門職の実践力を高めるケアプログラム応用」イニシア</p> <p>7. 島内節・友安直子・内田陽子 (2002) 「在宅ケアアウトカム評価と質改善の方法」医学書院</p>				
<p>授業計画 (15回)</p> <p>授業は講義・演習・討議形式によって展開する。</p> <p>システムティック・レビューと概念分析について理解をした上で、下記のテーマに関連して、システムティック・レビューを行う。ケアシステムや効果評価研究を比較検討しながら進める。</p> <p>1-2 システムティック・レビューと概念分析方法の修得 (2回)</p> <p>3-5 概念分析と測定尺度の開発 (3回)</p> <p>6-9 がん患者の症状緩和ケア介入プログラムの開発とその効果評価方法 (4回)</p> <p>10-13 エンドオブライフ患者とその家族のDying Careと看取ケアを効果的に行うためのエキスパートナースに対する教育介入プログラムの開発とその評価研究 (4回)</p> <p>14-16 がん患者の家族のグリーフケアと効果評価研究 (3回)</p> <p>17-20 エンド・オブ・ライフケア看護における介入研究とその効果評価研究 (4回)</p> <p>21-24 在宅エンドオブライフの経過時期別ニーズの変化とケアパス開発によるケア評価方法 (4回)</p> <p>25-28 エンド・オブ・ライフケアの実践教育プログラムの開発とその有効性検証 (4回)</p> <p>29-30 まとめ：学生のレポート発表と討論「看護の開発的研究と実践の相互的發展を促す研究の進め方」 (2回)</p>				
<p>評価方法</p> <p>1. 授業中の質疑・討議40% 2. 情報収集・分析30% 3. 課題に関する資料作成と発表30%</p>				
<p>評価基準</p> <p>A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)</p> <p>B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)</p> <p>C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)</p> <p>D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)</p>				
到達目標	A	B	C	D
1. システムティック・レビューの方法について理解できる。				
2. がん患者の緩和ケアにおけるチームケアおよびその効果評価方法を理解し、具体的な活用を検討できる。				
3. グリーフケア研究事例について分析し、ケア効果を評価し課題について検討できる。				
4. 在宅エンドオブライフの経過時期別ニーズの変化によるケア評価方法について、事例を分析し検討できる。				
5. エンド・オブ・ライフケアの実践教育プログラムの開発過程を理解し、とその有効性検証の方法について検討できる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG9101	実践看護学特別研究 D I	1年/通年	2
担当教員		課程	
山根友絵 宮田延実 深谷久子		博士課程後期	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本科目では、生涯発達看護学とエンド・オブ・ライフケア看護学の領域を実践看護学分野として、生涯発達看護とエンド・オブ・ライフケア看護の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む。実践看護学分野の研究において広い視野が持てるように、グローバルな視点の研究による専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になるために特別研究 D I では適切で実行可能な研究計画書を作成する。さらに、研究倫理審査委員会への提出をめざす。</p>
<p>授業内容</p> <p>本授業内容は、生涯発達看護とエンド・オブ・ライフケア看護の質保証を重視して専門性の高い看護を行うための科学的な知見を明らかにしていく。看護の現象をよりとらえやすい諸要素に分解し、それらの要素間にどのような関連があるのかについての枠組みを明確化して看護の実践に有用な研究を行う。そのため看護の改善・改革のために教育プログラムの開発、教育介入研究、教育システムの構築、臨床現場での看護管理実践やヘルスケアシステムの改善などについて展開し研究のプロセスを理解し、研究計画書を作成する。研究計画書には研究タイトル、研究動機、研究背景、研究対象、研究枠組みなど、研究の意義（研究の新規性・独創性・看護における意義、社会的価値）、研究デザイン、データ収集法、分析方法、研究の精度を保つ質管理方法、倫理的配慮などを加え、研究計画書を完成する。</p> <p>【担当教員の指導目的・指導の焦点・指導方法・研究テーマ】</p> <p>(山根友絵)</p> <p>生涯発達看護学における老年看護に関して、高齢者とその家族の生活の質向上につながるテーマを設定する。超高齢社会にあり、地域包括ケアシステムが推進される日本の現状を踏まえ、在宅高齢者と介護する家族への支援、認知症高齢者への支援、訪問看護における看護の質保証など、学生の関心のある分野の課題を探求する。研究手法としては、質的研究、量的研究を組み合わせ、実践に活用可能なプログラムの開発を目指す。</p> <p>(宮田延実)</p> <p>生涯発達看護学において、児童期から思春期にかけて心身の成長発達が著しい時期にかかわるテーマを設定する。特に、子どもたちの仲間集団や集団適応を視点にして、心理学や教育学的アプローチを用いて、学生の関心のある分野の課題を探求する。研究手法としては、主に量的研究を用いて、実践に活用可能なプログラムの開発を目指す。</p> <p>(深谷久子)</p> <p>生涯発達看護学における、子どもとその家族への看護の質の向上と対象者の最善の利益の保障を追究したテーマとする。発達段階からみた子どもの看護過程、先天性の疾患をもつ子どもと家族の看護に関する研究、NICUにおけるファミリーケア・NICU 医療チームと家族の協働、子育て支援、子どもの看護ケアや家族への支援、健康に課題のある子どものきょうだい支援、健康に課題のある子どもと家族がかかえる課題など、学生自身が興味関心のある分野の研究を探求する。研究手法としては、質的研究方法を主に用いて、子どもとその家族の健康増進、生活の質保証となるような支援方法や実践プログラムの開発をめざす。</p>

留意事項				
1. 国内外の文献などから情報収集を行い、レビューを作成する。 2. 授業への出席率と研究への積極的な取り組みが求められる。 3. レポートなどの提出物と発表資料は期日ごとに提出する。				
教材				
・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。				
授業計画 (30回)				
1-5 共通性が高く有用な研究課題と手法の代表的な研究例などを用いて講義演習を行う。 6-11 研究テーマと目的を決定：自己の関連研究において国内外文献のクリティークを行い、研究テーマ・研究目的を検討し、研究に関する社会的ニーズの分析・研究の新規性、独創性・社会的価値・研究倫理を明確にする。 12-14 研究デザインの選定、論文レポートと研究方法の適切性・妥当性を具体的に検討 15-16 研究目的を達成するために実行可能なデータ収集法を選択 17-19 データ分析法の選択 20-21 研究プロセスにおいて研究の精度を保つ質管理方法 22-26 研究計画書を作成 27-28 「研究計画発表会」の準備 29-30 発表した研究計画の評価に基づいて修正し、研究計画書を完成				
評価基準				
科目の到達目標の到達度により評価 A (100～80点)：到達目標に達している (Very Good) B (79～70点)：到達目標に達しているが不十分な点がある (Good) C (69～60点)：到達目標の最低限は満たしている (Pass) D (60点未満)：到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 学術誌での原著論文の水準を確認できる				
2. 研究テーマと目的について社会的ニーズの分析・研究の新規性・独創性・社会的価値・研究倫理を明確にし、研究テーマと目的を決定できる				
3. 適切な研究デザインを選択し、研究の具体的な方法を決定できる				
4. 研究データ収集方法の具体化とデータ分析方法を決定できる				
5. 研究プロセスにおける質管理方法を理解し活用できる				
6. 発表に適切な準備の上で「研究計画発表会」で発表し、質疑に適切に対応できる				
7. 看護実践の改善、変革への提言のために新しい知見が得られる研究計画書を作成できるように進める。				
8. 博士論文の計画審査の準備ができる				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG9202	実践看護学特別研究DⅡ	2年/通年	2
担当教員		課程	
山根友絵 宮田延実 深谷久子		博士後期課程	

授業計画詳細

授業目的

本科目では、生涯発達看護学とエンド・オブ・ライフケア看護学の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む。その2つの領域での分野は国内外で研究を広げ革新的なケアプログラムの開発やケアシステムの開発などを行う。またグローバルな研究によって専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になるために、特別研究DⅡでは、特別研究DⅠで示した研究領域の選択内での各自が設定した研究計画に沿って研究を実行しながら論文作成を行う。さらに、国際学会での発表、学術学会誌への論文投稿を目指す。

授業内容

本授業内容は、特別研究DⅠで示した研究領域の選択内で各自が設定した研究計画に沿って研究を進める。研究データの収集、データの分析、精度の高い結果を導き、その解釈、妥当性を検討、十分な文献による考察、結論を導く準備を行う。「中間発表会」で評価を得て論文を修正、論文の全体的な計画を実行しながら論文作成を目指す。

【担当教員の指導目的・指導の焦点・指導方法・研究テーマ】

(山根友絵)

生涯発達看護学における老年看護に関して、実践看護学特別研究DⅠで作成した研究計画書に基づき研究を遂行する。適切なデータ収集、分析を行い、先行研究を踏まえた考察を導く。老年看護の改善・改革のために、実践に活用できる支援方法や看護介入、支援モデルの開発など、新しい知見を得るための研究指導を行う。

(宮田延実)

生涯発達看護学において、児童期から思春期にかけて心身の成長発達が著しい時期にかかわるテーマについて、実践看護学特別研究DⅠで作成した研究計画書に基づき研究を遂行する。研究推進においてはAmosを用いて演習を行い、学生自身が興味関心のある分野の研究を探究する。

(深谷久子)

生涯発達看護学における、子どもとその家族への看護の質の向上と対象者の最善の利益の保障を追究したテーマについて、実践看護学特別研究DⅠで作成した研究計画書に基づき研究を遂行する。健康に課題のある子どもと家族がかかえる課題など、学生自身が興味関心のある分野の研究を探究する。中間発表会に向けた準備ができる。

留意事項

1. 国内外の文献などから情報収集を行い、文献レビューを作成する。
2. 授業への出席率と研究への積極的な取り組みが求められる。
3. レポートなどの提出物と発表資料は期日ごとに提出する。

教材

- ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。
- ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。

授業計画 (30回)				
<p>学生の個別研究</p> <p>研究プロセスにおけるレポート作成・発表・討論を継続し、研究を進める。</p> <p>1-2 研究計画の審査を経て、研究倫理審査承認を得て、研究計画に沿って研究の実施準備</p> <p>3-6 研究の精度を保つ方法でデータを収集</p> <p>7-11 効率的なデータ入力方法、適切なデータ分析方法によって、研究結果について信頼性と妥当性を検討して図、表を加えて文章化</p> <p>12-16 研究結果に基づいて、副論文について適切な考察と結論を導き論理的にまとめ</p> <p>17-23 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討</p> <p>24-25 「中間発表会」において適切な準備の上で発表・討論</p> <p>26-28 論文の発表会の評価に基づいて論文の修正</p> <p>29-30 論文を学術誌に投稿する準備</p>				
<p>評価基準</p> <p>研究の推進、データの収集・分析、データ分析内容に即した論文の作成、学会発表、学内中間発表の発表内容の精度、内容、評価</p> <p>A (100~80点) : 到達目標に達している (Very Good)</p> <p>B (79~70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)</p> <p>C (69~60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)</p> <p>D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)</p>				
到達目標	A	B	C	D
1. 博士論文研究計画書審査に合格することができる。				
2. 研究倫理審査申請書の提出ができる。				
3. 研究計画に沿って精度を保つ方法でデータが収集できる。				
4. 適切なデータ分析方法によって研究結果の信頼性と妥当性を検討できる。				
5. 分析に基づいて研究目的から結果・考察を適切に導くことができる。				
6. 博士論文中間発表会で発表し、質疑に適切に対応できる。				
7. 国際学会等において発表する準備ができる。				
8. 副論文の学術誌投稿を目指して研究を進めることができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DG9301	実践看護学特別研究DⅢ	3年/通年	2
担当教員		課程	
山根友絵 宮田延実 深谷久子		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本科目では、生涯発達看護とエンド・オブ・ライフケア看護の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む生涯発達看護学とエンド・オブ・ライフケア看護学の領域を実践看護学分野としている。その2つの領域での分野は国内外で研究を広げ革新的なケアプログラムの開発やケアシステムの開発などを行う。またグローバルな視点による研究によって専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になることを目指す。独創性があり先駆的な論文を作成し、博士論文を提出することを目指す。</p>
<p>授業内容</p> <p>実践看護学特別研究DⅡの研究経過に基づいて、研究結果をまとめ、適切な考察と結論を導き論文を作成する。研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討し、博士論文をまとめる。具体的には、各看護学領域の多様な課題に、理論の構築、看護方法論の開発・創造等により、学問的発展に貢献できる研究論文の作成を行う。また、臨床研究のケア評価などから、科学的なエビデンスに基づき看護の質や関連する施策の改善に寄与し、かつ教育的にも有用な研究成果を期待できる研究を行う。そして、研究結果から、理論を用いた検証を行うことで、さらに自己の研究を深められるようにする。</p> <p>【担当教員の指導目的・指導の焦点・指導方法・研究テーマ】</p> <p>(山根友絵)</p> <p>生涯発達看護学における老年看護に関して、実践看護学特別研究DⅠ、Ⅱをさらに発展・深化させ、研究結果から適切な考察と結論を導き、論文をまとめる。博士論文は、研究目的から結論まで、論旨の一貫性、及び信頼性・妥当性・客観性が求められる。老年看護学における課題に対して、教育・実践方法の開発、看護介入やプログラム開発、看護モデル・理論の開発等、新たな知見を創造できるように研究指導を行う。</p> <p>(宮田延実)</p> <p>生涯発達看護学において、児童期から思春期にかけて心身の成長発達が著しい時期にかかわるテーマについて、実践看護学特別研究DⅠ、Ⅱをさらに発展・深化させる。そして、研究結果から適切な考察と結論を導き、論文をまとめる。研究推進においては、パスモデルの構築を通して、教育的にも有用な研究成果が期待できる研究を行う。</p> <p>(深谷久子)</p> <p>生涯発達看護学における、子どもとその家族への看護の質の向上と対象者の最善の利益の保障を追究したテーマについて、実践看護学特別研究DⅠ・DⅡをさらに洗練させ、研究論文をまとめあげる。健康に課題のある子どもと家族がかかえる課題など、学生自身が興味関心のある分野の研究課題に対して、新規性・独創性・学術的価値・社会的価値のある独創的な研究とする。</p>
<p>留意事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 現場志向型研究の過程と方法を修得する。 2. 論理的・分析的思考に基づいた論文作成 3. 期日までに論文を仕上げる
<p>教材</p>

<ul style="list-style-type: none"> ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。 				
授業計画 (30回)				
1-6 特別研究DⅡの研究経過に基づいてさらに研究結果を見直し、適切な考察と結論を記述				
7-14 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討				
15-20 評価に基づいて修正				
21-30 博士論文としてまとめ、「最終発表会」で発表				
評価基準				
独創性があり先駆的な原著論文を作成する。				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 博士論文の作成に向けて研究を進めることができる。				
2. 学術集会への発表など研究成果を報告することができる。				
3. 研究成果として独創性・新規性・社会的価値について述べるができる。				
4. 独立した研究者としての能力を備え、幅広く深い知識を基盤としたさらなる研究を展開することができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DE2101	地域看護学特論 D	1年/前期	2
担当教員		課程	
松原紀子		博士後期課程	

授業計画詳細
授業目的
<p>地域で生活する人々の健康水準の向上をめざして、地域看護の実践と研究の相互関係的な進め方を講義と討論を中心として展開する。そこでエビデンスに基づいて地域看護活動の方向性と地域看護活動課題を見出す。地域の人々が保健行動を改善し、定着化できる力量を身につけていくことをめざす。そのために、自立して地区踏査、行政データの分析、調査等を通じて、地域の健康課題と、健康に関連する諸要因を明らかにし、課題解決に向けて行政と住民と各種組織・団体がチームで取り組むために、具体的な行動に移せる計画を住民や関係者と立案し、実行し、評価し、次の活動に生かす行動がとれるようになることをねらいとする。</p>
授業内容
<p>地域の人々の健康を守るために、地区診断の理論や、健康支援の理論、健康行動変容のための理論を応用して、地域看護活動の対象である集団と個（母子、児童生徒、成人、高齢者、難病、感染症、災害弱者など）を対象に焦点化して、現在の看護活動の改善と改革的提案を行い住民や各種関係機関の人々との共同計画によって取り組みの方法と評価指標を用いて実施できるようにする。また、諸外国の活動と我が国の活動を比較することで、今後の日本における活動の課題や展望を考察する。</p> <p>(15回)</p> <p>(7回) 地域看護活動における諸外国の制度、サービス提供システム、住民の健康課題別地域看護活動の動向を分析し、我が国における研究と実践課題の明確化をする。地域看護活動の対象者別（高齢者・スラム生活者）に健康水準について先行研究をクリティークし、因果関係・健康障害要因に関するデータ分析、健康課題をレビューする。地域看護活動の実践事例から住民の健康水準の変化を地域的、経年的、季節的、時間的变化について、データの偏りを排除した解析を用いて、信頼性と妥当性のある研究的評価を行い、実態を明らかにする。</p> <p>実践例を用いて保健事業活動の展開を阻害する要因（課題）を明確にし、改善方法を見す。健康課題に対する地域看護活動の方向性と地域の社会資源（関係機関、関係職種）を活用した個と集団のサービスプログラムと保健医療福祉サービス圏域におけるサービスシステムのあり方を検討し開発する。</p> <p>(6回) 地域看護活動の対象者別（母子、成人、難病、感染症・災害弱者）に健康水準について先行研究をクリティークし、因果関係・健康障害要因に関するデータ分析、健康課題をレビューする。</p> <p>住民の健康水準の経年的変化と地域看護活動の実際について人、物、金の側面から新たな改善方法を検討する。</p> <p>健康課題の解決のための方向性を住民・地域組織、地域の専門職などの人々と共有する。そのために住民や関係者に対して根拠のある健康情報を開示し、住民とともにあるべき方向を探るための計画の在り方を考察する。</p> <p>(松原紀子/1回) 明らかになった健康実態把握に対し、健康問題解決のための方法論としてインタビューなどの質的研究及び社会的、易学的な量的研究を行い、健康に影響する要因、様因の因果関係や関連、健康障害要因を明らかにする。</p> <p>(1回) 地域の人々の健康水準評価と地域看護活動展開の評価研究について、学生の内容学修度と課題についてレポート発表と討論でまとめを行う。</p>
留意事項
<p>授業に①積極的に参加すること、②授業の課題について事前に情報収集・分析しておくこと、③授業の中で自己の実践力強化と研究計画に反映させること。</p>

教材				
資料（書名、必要な文献など）は、その都度紹介する。				
授業計画（15回）				
1-2. 地域看護活動における諸外国の制度、サービス提供システム、住民の健康課題別地域看護活動の動向を分析し、我が国における研究と実践課題の明確化する。（巽あさみ/松原紀子/2回）				
3-4. 地域看護活動の対象者別（高齢者・スラム生活者）に健康水準について先行研究をクリティークし、因果関係・健康阻害要因に関するデータ分析、健康課題をレビューする。（2回）				
5-6 地域看護活動の実践事例から住民の健康水準の変化を地域的、経年的、季節的、時間的变化について、データの偏りを排除した解析を用いて、信頼性と妥当性のある研究的評価を行い、実態を明らかにする。（2回）				
7. 実践例を用いて保健事業活動の展開を阻害する要因（課題）を明確にし、改善方法を見出す。健康課題に対する地域看護活動の方向性と地域の社会資源（関係機関、関係職種）を活用した個と集団のサービスプログラムと保健医療福祉サービス圏域におけるサービスシステムのあり方を検討し開発する。（1回）				
8-10. 地域看護活動の対象者別（母子、成人、難病、感染症・災害弱者）に健康水準について先行研究をクリティークし、因果関係・健康阻害要因に関するデータ分析、健康課題をレビューする。（3回）				
11-12. 住民の健康水準の経年的変化と地域看護活動の実際について人、物、金の側面から新たな改善方法を検討する。（2回）				
13. 健康課題の解決のための方向性を住民・地域組織、地域の専門職などの人々と共有する。そのために住民や関係者に対して根拠のある健康情報を開示し、住民とともにあるべき方向を探るための計画の在り方を考察する。（1回）				
14. 明らかになった健康実態把握に対し、健康問題解決のための方法論としてインタビューなどの質的研究及び社会学的、疫学的な量的研究を行い、健康に影響する要因、要因の因果関係や関連、健康阻害要因を明らかにする。（1回）				
15. 地域の人々の健康水準評価と地域看護活動展開の評価研究について、学生の内容学修度と課題についてレポート発表と討論でまとめを行う。（1回）				
評価方法				
1. 授業中の発表・質疑・討論 40% 2. 情報収集・分析 30% 3. レポート 30%				
評価基準				
A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
地域の人々の健康を守るための地区診断の理論や、健康支援の理論、健康行動変容のための理論を理解し応用できる。				
地域看護活動の対象である集団と個（母子、成人、高齢者、難病、感染症、災害弱者など）を対象に焦点化して健康課題の抽出ができる。				
健康課題に沿って、現在の看護活動の改善と改革的提案を行うことができる。				
提案した地域看護活動について、住民や各種関係機関の人々との共同計画によって取り組みの調整ができる。				
諸外国の活動と我が国の活動を比較することで、今後の日本における活動の課題や展望の考察ができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DE2201	地域看護学演習 D	1年/通年	2
担当教員		課程	
松原紀子		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>地域看護学特論 D」において、理論や展開方法を講義で行った地域看護課題の内容について研究的視点と方法を用いて実践での具体的な展開方法を演習によって行い、研究と実践の相互関係的發展を促す進め方について基盤となる能力を修得する。</p> <p>そのために国内外の文献検討を踏まえ、地域看護活動の具体的な対象集団に対し、分野別の健康課題解決に向けて、研究的に取り組むための検討を行い考察を深める。同時に住民の健康水準向上のための問題解決方を住民が主体的に取り組むことができるよう、その支援方法についての研究を自立して行うことができるようになる。「地域看護学特論 D」の内容を基盤にして、地域看護活動を進めるために具体的な対象集団に対し、海外及び国内自治体等から公表されているデータと、地域看護活動や住民からの聞き取り等から得られるフィールドワークを分析し、健康課題解決のための要因を明らかにする。また、住民と健康課題を共有し、健康水準向上のための活動計画を立案することができる。本演習の過程から、学生が自己の研究課題についての探求する基盤を修得する。</p>
<p>授業内容</p> <p>地域看護活動における諸外国の制度、サービス提供システム、住民の健康課題別地域看護活動の動向と我が国活動課題を明確化する。対象者別の集団・個別の健康の水準について先行研究をクリティークし、因果関係や健康阻害要因に関するデータ分析を行い住民の健康課題をレビューする。</p> <p>地域看護活動の実践事例から住民の健康水準の変化を地域的、経年的、季節的、時間的变化について、信頼性と妥当性のある研究方法と評価の在り方を追究する。健康に影響する要因と因果関係や関連、健康阻害要因を明らかにする。実践例を用いて保健事業活動の展開を阻害する要因を明確にし、改善方法を見出す。健康水準の経年的変化と地域看護活動の実際について人、物、金の側面から新たな改善方法を検討する。健康課題の解決の方向性を住民・地域組織、地域の専門職などと共有した上での解決策を見出し、根拠のある健康情報の開示・提供の有効な方法について検討、具体的に方策を提案する。個と集団のサービスプログラムと保健医療福祉サービス圏域におけるサービスシステムのあり方を開発する。地域看護活動展開の評価研究について、学生の学修度と課題についてレポート発表と討論を行う。</p> <p>(全 30 回)</p> <p>(4 回) 地域看護活動における諸外国の制度、サービス提供システム、住民の健康課題別地域看護活動の動向を分析し、我が国の研究と実践課題を明確化する。</p> <p>(10 回) 国内・外の地域看護活動の対象者別の集団・個別に健康の水準について先行研究をクリティークし、因果関係や健康阻害要因に関するデータ分析を行い住民の健康課題をレビューする。</p> <p>(4 回) 地域看護活動の実践事例から住民の健康水準の変化を地域的、経年的、季節的、時間的变化について、データの偏りを排除した解析を用いて、信頼性と妥当性のある研究方法と評価の在り方を追究する。健康実態把握と健康問題解決のための方法論をインタビューなどの質的研究及び社会的、疫学的な量的研究方法を追究し、健康に影響する要因と因果関係や関連、健康阻害要因を明らかにする。</p> <p>(10 回) 実践例を用いて保健事業活動の展開を阻害する要因(課題)を明確にし、海外文献等も検討の上、改善方法を見出す。民の健康水準の経年的変化と地域看護活動の実際について人、物、金の側面から新たな改善方法を検討する。健康課題の解決の方向性を住民・地域組織、地域の専門職などと共有した上での解決策を見出す。住民や関係者に根拠のある健康情報の開示・提供の有効な方法について検討、具体的に方策を提案する。健康課題に対する地域看護活動の方向性と地域の社会資源(関係機関、関係職種)を活用した個と集団のサービスプログラムと保健医療福祉サービス圏域におけるサービスシステムのあり方を検討し開発する。</p> <p>(2 回) まとめ。地域の人々の健康水準評価と地域看護活動展開の評価研究について、学生の学修度と課題についてレポート発表と討論を行う。</p>
<p>留意事項</p> <p>・授業に①積極的に参加すること、②授業の課題について事前に情報収集・分析しておくこと、③授業の中で自己の実践力強化と研究計画に反映させること。共通科目 B(フィジカルアセスメント特論、臨床薬理学特論、病</p>

態生理学特論)の履修が望ましい。				
教材				
資料(書名、必要な文献など)は、その都度紹介する。				
授業計画 (15回)				
1-4. 地域看護活動における諸外国の制度、サービス提供システム、住民の健康課題別地域看護活動の動向を分析し、我が国の研究と実践課題を明確化する。(4回)				
5-14. 国内・外の地域看護活動の対象者別の集団・個別(母子:3成人:3、高齢者:1、精神:1、難病:1、感染症・災害弱者:1)に健康の水準について先行研究をクリティークし、因果関係や健康阻害要因に関するデータ分析を行い住民の健康課題をレビューする。(10回)				
15-16. 地域看護活動の実践事例から住民の健康水準の変化を地域的、経年的、季節的、時間的変化について、データの偏りを排除した解析を用いて、信頼性と妥当性のある研究方法と評価の在り方を追究する。(2回)				
17-18. 健康実態把握と健康問題解決のための方法論をインタビューなどの質的研究及び社会的、疫学的な量的研究方法を追究し、健康に影響する要因と因果関係や関連、健康阻害要因を明らかにする。(2回)				
19-20. 実践例を用いて保健事業活動の展開を阻害する要因(課題)を明確にし、海外文献等も検討の上、改善方法を見出す。(2回)				
21-22. 住民の健康水準の経年的変化と地域看護活動の実際について人、物、金の側面から新たな改善方法を検討する。(2回)				
23-24. 健康課題の解決の方向性を住民・地域組織、地域の専門職などと共有した上での解決策を見出す。住民や関係者に根拠のある健康情報の開示・提供の有効な方法について検討、具体的に方策を提案する。(2回)				
25-28. 健康課題に対する地域看護活動の方向性と地域の社会資源(関係機関、関係職種)を活用した個と集団のサービスプログラムと保健医療福祉サービス圏域におけるサービスシステムのあり方を検討し開発する。(4回)				
29-30. まとめ。地域の人々の健康水準評価と地域看護活動展開の評価研究について、学生の内容学修度と課題についてレポート発表と討論を行う。(2回)				
評価方法				
1. 演習中の質疑・討議 40%、2. 情報収集・分析 30%、3. レポート作成と発表 30%				
評価基準				
1. 授業中の発表・質疑・討論 40% 2. 情報収集・分析 30% 3. レポート 30% 教員別の配点は、授業の時間比率で算出する。 A(100~80点): 到達目標に達している(Very Good) B(79~70点): 到達目標に達しているが不十分な点がある(Good) C(69~60点): 到達目標の最低限は満たしている(Pass) D(60点未満): 到達目標の最低限を満たしていない(Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 地域で生活する人々の健康上の課題を抽出することができる。				
2. 海外の先進・後進国のデータを我が国の健康水準と比較検討し、具体例を用いて実践的な評価ができる。				
3. 地域の人々や関係機関、関係職種に健康課題を解決するための必要性について説明でき、対象集団、関係機関等と課題解決に向けたシステム構築の説明ができる。				
4. 健康課題別に生活圏域において、適切なサービス計画やサービスシステムに取り組むことができる。				
5. 学修を自己の研究課題や研究計画書作成に反映させることができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DE9101	広域看護学特別研究D I	1年/通年	2単位
担当教員		課程	
松原紀子		博士後期課程	

授業計画詳細

授業目的

目的は地域看護学、国際保健看護学の領域を広域看護学分野としている。看護の対象となる人々の QOL の向上を目指して、社会情勢の急激な変化から生じる顕在化した健康課題や潜在する健康課題を解決するために、研究を用いて解決の方法を見出すことにある。最初の段階である課題を明確にすること、さらに研究目的、方法（対象と調査方法）を明確にし、介入研究、ケースコントロール研究、コホート研究などのよりエビデンス水準の高い研究計画や複雑な現象を、厳密性を確保した方法で読み解き、ケアの質向上に寄与できる研究計画について教授する。看護研究と実践の相互関係的発展を促進させる実践科学として学問的発展に貢献できる高度で活動的・創造的な自立した研究者・教育者をめざし、初年度は、研究計画書の作成をし、博士論文計画審査準備を行う。さらに、研究倫理審査委員会への提出を目指す。

授業内容

明らかにしようとする課題を明確に定め、国内外の文献検討を行い、研究の現象をよりとらえやすい諸要素に分解し、それらの要素間にどのような関連があるのかについての概念枠組みを明確化（関心を持っている課題が、どのような要因、変数、過程にどのように関連しているのか）し、理論的・一般的な前提での仮説設定を行う。そのうえで、研究過程（対象者と調査方法、データ収集、データ分析、結果と考察）を概観し、研究計画を策定する。仮説を科学的に実証していくための厳格な調査・実験等の方法についてしっかりと学んで計画を立てること。また、研究過程でとらえた解釈の限界も十分に認識し考察しておく。研究計画書には研究タイトル、研究動機、研究背景、研究対象のとらえ方（研究枠組みなど）研究の意義（研究の新規性・独創性・看護における意義、社会的価値）、実施計画、必要経費、倫理的配慮について記載する。さらに研究デザインと具体的な研究方法の選択、研究方法の適切性・妥当性の検討、研究の対象、データ収集法・データ分析法・研究のプロセスにおける質管理方に法を含めて検討する。明らかにしたい看護の課題について①厳密な研究対象の選定や介入研究など精度の高い研究方法の選択を行うなど、より高いエビデンスを生み出すための方法を吟味して、研究計画書を作成する。

グローバル化に伴う、世界的な健康問題や国境を超えて移動している人々、来日外国人の健康問題、健康課題の研究指導を行う。海外で実施する研究も含む。新興・再興感染症、グローバル化に伴う国際的な感染症の拡がりなど、感染症に対する看護職者の役割は益々重要となっている。ハンセン病やエイズに見るように、感染者、家族への差別が予防や医療の遅れを生み、また社会的な偏見や差別の対象となっている人々やコミュニケーションが不自由な来日外国人では対策が届きにくいなどの課題が生じている。一方で新型インフルエンザや SARS には迅速な対応が地域や医療の場面に求められており、今日の感染症には多面的な視点を持った研究が必要となっている。HIV などの感染症をテーマに、発生動向、疫学研究、感染リスクと予防対策、医療と看護などの先行研究を多面的な視点から総括し、地域や医療の場面で必要とされる課題について解明する研究を行う。研究デザインと具体的な研究方法の選択、研究方法の適切性と妥当性の検討、研究対象者、データ収集法・データ分析法・研究プロセスなどの研究計画書を作成する。

留意事項

1. 科学文献などから情報収集と分析、論理的な思考とレビューを作成すること。
2. レポートなどの提出物は期限を厳守のこと。
3. 授業および研究への積極的な取り組み、行動が求められる。

教材

1. 学生は自己の研究課題に関連した国内外の文献をレビューすること。
2. 教員は必要に応じて研究テキスト・研究論文・資料を示す。

授業計画 (15回)				
1～4 広域看護学分野の教員の参加のもと、研究課題の認識。				
5～8 自己の関連研究において国内外文献のクリティークを行い、研究テーマ・研究目的を検討し、研究に関する社会的ニーズの分析・研究の新規性・独創性・社会的価値・研究倫理を検討。研究テーマと目的を決定。				
9～13 概念枠組みの明確化と仮説の設定。				
14～19 研究対象と研究方法の設定（決研究目的を達成するために実行可能なデータ収集法とデータ分析法を検討）。 調査方法の選択（研究デザインの選択と研究方法の適切性・妥当性を具体的に検討し決定）。 研究の限界の検討（結果解釈の限界を明確にしておく）。 研究プロセスにおいて研究の精度を保つ質管理方法を検討。				
20～22 研究計画書を作成。				
23～26 研究科委員会が開催する学生と教員の参加による「発表会」での発表・討論準備。				
27～28 発表した研究計画の評価に基づいて修正し、研究計画書を完成。				
29～30 研究計画書を研究倫理審査委員会へ提出をめざす。				
評価方法				
1. 授業中の質疑-討議 40%、2. 文献検討と課題の抽出 30%、研究計画書の作成 30%				
評価基準				
科目の到達目標の到達度により評価 A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good) B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good) C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass) D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
・研究テーマと目的について社会的ニーズの分析・研究の新規性・独創性・社会的価値・研究倫理を検討し、研究テーマと目的を決定できる				
・適切な研究デザインを選択し、研究の具体的な方法を決定できる				
・研究データ収集方法の具体化とデータ分析法を決定できる				
・研究プロセスにおける質管理方法を理解し活用できる				
・「研究計画発表会」に適切な準備の上で発表し、質疑に適切に対応できる。				
・看護実践の改善、変革または政策への提言のために新しい知見が得られる研究計画書作成できるように進める。				
・博士論文の計画審査の準備ができる				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DE9201	広域看護学特別研究DⅡ	2年/通年	2単位
担当教員		課程	
松原紀子		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>目的は地域看護学、国際保健看護学の領域を広域看護学分野としている。看護の対象となる人々のQOLの向上を目指して、社会情勢の急激な変化から生じる顕在化した健康課題や潜在する健康課題を解決するために、研究を用いて解決の方法を見出すことにある。最初の段階である課題を明確にすること、さらに研究目的、方法（対象と調査方法）を明確にし、介入研究、ケースコントロール研究、コホート研究などのよりエビデンス水準の高い研究計画や複雑な現象を、厳密性を確保した方法で読み解き、ケアの質向上に寄与できる研究計画について教授する。倫理審査提出前に3名による審査合格、倫理審査提出、中間発表会Iで発表をする。看護研究と実践の相互関係の発展を促進させる実践科学として学問的発展に貢献できる高度で活動的・創造的な自立した研究者・教育者をめざし、フィールドに出て対象者からデータの収集を行い、得られたデータを解析し、信頼性と妥当性を備えた結果解釈を行い、考察へと導く。さらに国際学会に発表をめざし、論文を学会誌に投稿するための準備ができる。</p>
<p>授業内容</p> <p>特別研究DⅠで作成した研究計画書に従って、データの収集を行う。得られたデータの分析は質的データ・量的データにより異なる。量的データは記述統計を行い、その後目的を明らかにできる統計手法を用いて、分析し結果を整理する。結果から仮説の検証と解釈を行う。質的データは事実の記述・説明、具体例の提示、関係性の理論、理論の発見について、これまでなかった新知見を理論的な手段で整理しまとめる。</p> <p>国際保健看護の研究で、グローバル化に伴う、世界的な健康問題や国境を超えて移動している人々、来日外国人の健康問題、健康課題の研究指導を行う。海外での調査研究。新興・再興感染症、グローバル化に伴う国際的な感染症の拡がりなど、感染症に対する看護職者の役割は益々重要となっている。HIVなどの感染症に関する先行研究を多面的な視点から総括し、地域や医療の場面で必要とされる課題を解明する研究について、研究計画審査、倫理審査委員会承認を得て、研究を開始する。研究の成果を副論文として学術誌への投稿を目指し研究を進める。</p>
<p>留意事項</p> <p>研究の推進、データの収集・分析、データ分析、解釈、発表などに積極的に取り組む。</p>
<p>教材</p> <p>適宜、必要に応じて示す。</p>
<p>授業計画（30回）</p> <p>1-2 特別研究Ⅰの研究計画について、研究倫理審査委員会の承認を得て、研究計画に沿って研究の実施準備</p> <p>3-6 研究の精度を保つ方法でデータを収集</p> <p>7-11 効率的なデータ入力方法、適切なデータ分析方法によって、研究結果について信頼性と妥当性を検討して図、表を加えて文章化</p> <p>12-16 研究結果に基づいて、論文（副論文を含む）について適切な考察（結論を含む場合がある）を導き論理的にまとめ</p> <p>17-20 研究目的から考察（結論を含む場合がある）までの論旨一貫性を検討</p> <p>21-22 「発表会Ⅱ（博士論文中間）」において適切な準備の上で発表・討論</p> <p>23-25 論文の発表会の意見・討論に基づいて論文の修正</p> <p>26-27 研究成果を国内・国際学会において発表の準備</p> <p>28-30 副論文を学術誌に投稿準備</p>
<p>評価方法</p>

1. 授業中の質疑-討議 40%、2. データの収集・分析 30%、3. 論文作成の準備 30%				
評価基準				
科目の到達目標の到達度により評価する				
A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
・ 研究計画に沿って精度を保つ方法でデータが収集できる。				
・ 適切なデータ分析方法によって研究結果の信頼性と妥当性を検討できる。				
・ 分析に基づいて研究目的から結果・考察を適切に導くことができる。				
・ 倫理審査提出前に 3 名による審査に合格できる				
・ 倫理審査申請書の提出ができる				
・ 博士論文中間発表会 I で発表し、質疑に適切に対応できる。				
・ 研究したものを国際学会において発表する準備ができる。				
・ 副論文を学術誌に投稿する準備を進めることができる。(3 月末までをめざす)				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DE9301	広域看護学特別研究DⅢ	3年/通年	2単位
担当教員		課程	
松原紀子		博士後期課程	

授業計画詳細				
授業目的				
<p>地域看護学、国際保健看護学の領域を広域看護学分野としている。看護の対象となる人々のQOLの向上を目指して、社会情勢の急激な変化から生じる顕在化した健康課題や潜在する健康課題を解決するために、研究を用いて解決の方法を見出すことにある。得られた結果を、十分に吟味し、期日までに博士論文をまとめて提出をめざす。中間発表会Ⅱ発表を行う。博士論文予備審査を受ける。副論文の掲載又は掲載証明を得る。国際学会発表できる。最終発表会発表をめざす。</p>				
授業内容				
<p>特別研究DⅢの目的は、特別研究DⅠと特別研究DⅡで行ってきた研究結果を用いて研究枠組みの検証を行い、一般化への提言をまとめ、原著論文の作成を行う。国内外の発表と、原著論文の投稿をする。</p> <p>グローバル化に伴う、世界的な健康問題や国境を超えて移動している人々、来日外国人の健康問題、健康課題の研究指導を行う。新興・再興感染症、グローバル化に伴う国際的な感染症の拡がりなど、感染症に対する看護職者の役割は益々重要となっている。HIVなどの感染症に関する先行研究を多面的な視点から総括し、地域や医療の場面で必要とされる課題を解明する研究課題について、国際学会発表、副論文掲載、得られた研究成果の博士論文作成、提出を目指し研究を進める。</p>				
留意事項				
科学的知見に基づいた論文作成を行う				
教材				
・教員は必要に応じて研究テキスト・研究論文・資料を紹介する。				
授業計画（30回）				
<p>1～10 特別研究DⅡの研究結果に基づいて、さらに研究結果を見直し適切な考察と結論を記述する</p> <p>11～14 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討する。</p> <p>15～17 看護における研究の意義について再考し、論文としてまとめる。</p> <p>18～20 発表会Ⅲ（博士論文中間）において適切な準備の上で発表と討論を行う。</p> <p>21～22 中間発表した論文の意見・評価に基づいて修正する。</p> <p>23～25 論文最終発表会において適切な発表と質疑ができる。</p> <p>26～27 期日までに論文を完成させる。</p> <p>29～30 論文の審査において説明と質疑に適切に対応できる。</p>				
評価方法				
1. 授業中の質疑-討議 40%、2. 論文の作成 30%、3. 研究発表と質疑応答 30%				
評価基準				
<p>科目の到達目標の到達度により評価する</p> <p>A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)</p> <p>B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)</p> <p>C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)</p> <p>D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)</p>				
到達目標	A	B	C	D
1. 博士論文の作成に向けて研究を進めることができる。				
2. 学術集会への発表など研究成果を報告することができる。				
3. 研究成果として独創性・新規性・社会的価値について述べるすることができる。				

4. 独立した研究者としての能力を備え、幅広く深い知識を基盤としたさらなる研究を展開することができる。				
---	--	--	--	--

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DF2101	助産学特論 D	1年/前期	2
担当教員		課程	
杉下佳文		後期課程	

授業計画詳細
授業目的
<p>リプロダクティブヘルスや助産学の歴史および理論を学び、母性と父性を育む看護学とジェンダー視点から今日的課題の生殖医療における倫理と女性の人権を守る視座で、女性のエンパワーメントを高める健康支援の課題を明確にする。また、助産学的観点から周産期および思春期から更年期までの女性とその家族を対象に近年のトレンドとなる助産ケアの方略を探求する。</p>
授業内容
<p>自立した実践リーダー・管理者・教育者の育成のために性と生殖に関する健康課題や健康問題から、近年の動向について研究論文をもとに講述する。Well-being の維持や各健康問題に対する援助方法論では、看護理論やその活用法を講義しディスカッションする。院生は生殖医療の倫理的問題や施策を理解し、女性がリプロダクトの正しい知識や意志決定ができ次世代育成遂行に向け、看護活動や研究ができるよう助産ケアの本質から論文をクリティカルに分析し、助産学として新しい理論構築の方法を学ぶ。</p>
評価方法
<p>課題についてプレゼンテーション 50%、討議・ディベート 50%</p>
留意事項
<p>助産学課題研究 I と連動している。講義及び課題についてプレゼンテーションやレポート発表や、討議・ディベートを行うので、積極的に参加することを期待する。本科目の単位取得にあたり、30 時間の自己学習が必要である。</p>
教材
<p>適時、配布資料として紹介する。</p>
授業計画(回)
<ol style="list-style-type: none"> 1. 母性看護に有用な概念と理論 2. 母性看護に有用な概念と理論 3. 助産学における概念と理論 4. 助産学における概念と理論 5. 助産学に有用な概念と理論における課題 発表と討論 6. 助産学に有用な概念と理論における課題 発表と討論 7. 海外における助産ケアの文献検討 8. 海外における助産ケアの文献検討 9. 海外における助産ケアにおける課題 発表と討論 10. 海外における助産ケアにおける課題 発表と討論 11. 夫婦関係・家族関係における助産学的文献検討 12. 子育て支援における助産学的文献検討 13. 対象理解のためのアプローチ方法 14. 疫学的な研究手法 質的帰納的な研究手法・生理的な測定方法 15. 自己の課題発表と討論および評価
評価基準
<p>A (100~80 点) : 到達目標に達している (Very Good)</p>

B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. リプロダクティブヘルスおよび助産学に関する健康問題と健康課題の国内外の今日的動向を分析し、探究すべき課題の提示ができる。				
2. リプロダクティブヘルスケアおよび助産学に関する健康課題や健康問題への科学的アプローチの方法を説明できる。				
3. 助産ケアについて研究的視点を持った実践方法を説明できる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DF2201	助産学演習 D	1年/後期	2
担当教員		課程	
杉下佳文		後期課程	

授業計画詳細
授業目的
助産学の視座から生涯を通じた女性の健康支援の学問分野から知識に依拠し、子どもを産み育てるケアの本質を追究する方法と理論を教授し、自己の関心課題を中心に、文献検討を通し研究的感性を培う。更に自己の研究課題を明確にできるよう事例を用い問題や課題を討議し、健康に関わる研究をクリティカルに分析し、女性の安寧を考慮した理論構築とケアシステム確立に向かう博士論文作成を容易にする。
授業内容
助産学の文献の分析で看護介入モデルを検討し、自己の研究課題を明確にできるよう実践から女性の健康を考え、研究的に発展させる。特に、周産期および助産ケアを必要とする思春期・更年期講座や子育て家族や、医療施設の実践活動に参加し対象のアセスメントから、研究課題を探求する。また、今日的動向を取り上げ講述しながら、Well-being の維持や各健康問題の看護援助の方法論では理論やその活用法を講義し、質疑し討議する。
評価方法
1回の授業時間：90分、助産学および母性看護理論や今日的課題や動向を中心に進める。講義及び課題についてプレゼンテーションやレポート発表や、討議・ディベートを行うので、積極的に参加することが必要である。
留意事項
講義と課題学習に毎回参加して、討議やプレゼンテーションを積極的に行うことを求める。また、学会参加および発表、可能な範囲で地域へ出向き演習として体験学習を期待する。講義の必携テキストは多く提示されているが、文献に親しみ読破することを望む。
教材
1.APA 論文作成マニュアル：APA 著、江藤裕之他：医学書院・2000：3800＋税 2.グランデッド・セオリー・アプローチ実践ワークブック：さい木クレイグヒル滋子著：日本看護協会出版会・2010、2400＋税 3.質的研究方法ゼミナール：さい木クレイグヒル滋子著：医学書院・2008、2600＋税 4.研究デザインー質的・量的そしてミックス法：John W. Creswell 著、操 華子他：日本看護協会出版会・2008：3000＋税。 研究論文を中心に適宜使用
授業計画(回)
1-3：自己の課題とエビデンスの創造 1) ガイダンス・自己の課題の発表 2) 自らの関心領域の文献調査、討論、クリティークレポート作成 3) 教員や学生が相互に質疑・討議して効果的に進める。 4-9：周産期周辺の助産や看護における業務管理、ケア評価、周産期周辺の母子支援システムを充実・発展させるうえでのリーダーシップ、社会参画の方法リーダーの役割能力・コンサルテーション能力向上 1) 母子支援システムと、ケアの質保証のためにスタッフへのケア支援 2) 他職種・機関との連携調整方法の実際 3) 倫理的調整の方法 4) 中間管理者としてのリーダーの役割・機能

10-12:文献検討の課題の討論・まとめを行う。

13-18:周産期センターにおける看護業務管理、ケア評価について

- 1) 個人情報の保護の方法
- 2) 個別事例と家族のケアの質管理方法
- 3) 事例ケアの質保証のためのケアの組織化とケア評価、及びケア体制づくり
- 4) 人事管理と組織力強化
- 5) 周産期センターにおける危機管理
- 6) ケアの質管理と経営管理を両立させる方法

19-21:文献検討および考察の課題の討論・まとめを行う。

22-27: 海外における助産ケアの文献検討

- 1) 夫婦関係・家族関係における助産学的文献検討
- 2) 子育て支援における助産学的文献検討

28-30:これまでの課題をレポートし、発表・討論・まとめを行う。

評価基準

A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good)
 B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)
 C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)
 D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)

到達目標	A	B	C	D
1. 助産学領域における自らの研究課題を明示できる。				
2. 助産学に関する健康問題と健康課題の国内外の今日的動向を分析し、探究すべき課題の提示ができる。				
3. 助産学に関する健康課題や健康問題への科学的アプローチの方法を説明できる。				
4. 科学的根拠を持った助産ケアの方法を説明することができる。				
5. 自らの積極的な意見を持ち、活発な討議を行うことができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DF9101	助産学特別研究 D I	1年/通年	2
担当教員		課程	
杉下佳文		博士課程後期	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本科目の目的は、助産学の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む。発達看護学分野の研究において広い視野が持てるようにするために、分野単位で共同学修をしたあとに二つの領域のいずれかにおいて個別研究を行う。グローバルな視点の研究による専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になるために特別研究 D I では適切で実行可能な研究計画書を作成する。さらに、研究倫理審査委員会への提出を目指す。</p>
<p>授業内容</p> <p>本授業内容は、助産学の質保証を重視して専門性の高い看護を行うための科学的な知見を明らかにしていく。看護の現象をよりとらえやすい諸要素に分解し、それらの要素間にどのような関連があるのかについての枠組みを明確化して看護の実践に有用な研究を行う。分野で共同学修をした後に2つの領域のいずれかにおいて個別研究を行う。そのため看護の改善・改革のために教育プログラムの開発、教育介入研究、教育システムの構築、臨床現場での看護管理実践やヘルスケアシステムの改善などについて展開し研究のプロセスを理解し、研究計画書を作成する。研究計画書には研究タイトル、研究動機、研究背景、研究対象、研究枠組みなど、研究の意義（研究の新規性・独創性・看護における意義、社会的価値）、研究デザイン、データ収集法、分析方法、研究の精度を保つ質管理方法、倫理的配慮などを加え、研究計画書を完成する。</p>
<p>留意事項</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 国内外の文献などから情報収集を行い、レビューを作成する。 2. 授業への出席率と研究への積極的な取り組みが求められる。 3. レポートなどの提出物と発表資料は期日ごとに提出する。
<p>教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。
<p>授業計画（30回）</p> <p>1-5 共通性が高く有用な研究課題と手法の代表的な研究例などを用いて講義演習を行う。</p> <p>6-11 研究テーマと目的を決定：自己の関連研究において国内外文献のクリティークを行い、研究テーマ・研究目的を検討し、研究に関する社会的ニーズの分析・研究の新規性、独創性・社会的価値・研究倫理を明確にする。</p> <p>12-14 研究デザインの選定、論文レポートと研究方法の適切性・妥当性を具体的に検討</p> <p>15-16 研究目的を達成するために実行可能なデータ収集法を選択</p> <p>17-19 データ分析法の選択</p> <p>20-21 研究プロセスにおいて研究の精度を保つ質管理方法</p> <p>22-26 研究計画書を作成</p> <p>27-28 「研究計画発表会」の準備</p> <p>29-30 発表した研究計画の評価に基づいて修正し、研究計画書を完成</p>
<p>評価方法</p> <p>課題についてプレゼンテーション50%、討議・ディベート50%</p>
<p>評価基準</p> <p>科目の到達目標の到達度により評価</p>

- A (100～80点) : 到達目標に達している (Very Good)
- B (79～70点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)
- C (69～60点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)
- D (60点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)

到達目標	A	B	C	D
1. 学術誌での原著論文の水準を確認できる				
2. 研究テーマと目的について社会的ニーズの分析・研究の新規性・独創性・社会的価値・研究倫理を明確にし、研究テーマと目的を決定できる				
3. 適切な研究デザインを選択し、研究の具体的な方法を決定できる				
4. 研究データ収集方法の具体化とデータ分析方法を決定できる				
5. 研究プロセスにおける質管理方法を理解し活用できる				
6. 発表に適切な準備の上で「研究計画発表会」で発表し、質疑に適切に対応できる				
7. 看護実践の改善、変革への提言のために新しい知見が得られる研究計画書を作成できるように進める。				
8. 博士論文の計画審査の準備ができる				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DF9202	助産学特別研究 DII	2年/通年	2
担当教員		課程	
杉下佳文		博士後期課程	

授業計画詳細
<p>授業目的</p> <p>本研究では、助産学およびリプロダクティブヘルス看護学の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のため先進的な課題で実践的研究に取り組む分野としている。国内外で研究を広げ革新的なケアプログラムの開発やケアシステムの開発などを行う。またグローバルな研究によって専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になるために、特別研究Ⅱでは、特別研究 D I で示した研究領域の選択内での各自が設定した研究計画に沿って研究を実行しながら論文を作成する。さらに、国際学会に発表し、論文を学術学会誌に投稿するための準備ができる。</p>
<p>授業内容</p> <p>本授業内容は、特別研究 D I で示した研究領域の選択内での各自が設定した研究計画に沿って研究を進める。研究データの収集、データの分析、精度の高い結果を導き、その解釈、妥当性を検討、十分な文献による考察、結論を導く。「中間発表会Ⅰ」で評価を得て論文を修正、論文の全体的な計画を実行しながら論文を完成する。</p> <p>具体的には助産学およびリプロダクティブヘルスに関して、海外文献を抄読し、国内文献クリティークから文献レビューして知見をひろげ、倫理的問題や心理的ケア、ケアシステム研究に着目した授業展開である。</p> <p>【担当教員の指導目的・指導の焦点・指導方法・研究テーマ】</p> <p>① 助産やリプロダクティブヘルスに関して、なかでも周産期周辺の母子関係、母乳育児支援、産褥期の母親役割、思春期の性行動と親性、性教育と親役割達成、などの性と生殖の健康に関わる研究疑問に対する質のよい看護援助法を探求する。</p> <p>② 研究テーマは母乳育児支援、周産期周辺の母子関係などに関する研究に取り組む研究領域では、リプロダクティブヘルスに関して、なかでも周産期周辺の母子関係、母乳育児支援、産褥期の母親役割、思春期の性行動と親性、性教育と親役割達成などの性と生殖の健康に関わる研究疑問に対する質のよい看護援助法を探究する。博士課程ではこれらの臨床疑問について、質的・量的に探究する研究手法を用い、看護援助法の開発や概念研究の研究過程の講義をする。</p>
<p>留意事項</p> <p>1. 国内外の文献などから情報収集を行い、文献レビューを作成する。</p> <p>2. 授業への出席率と研究への積極的な取り組みが求められる。</p> <p>3. レポートなどの提出物と発表資料は期日ごとに提出する。</p>
<p>教材</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。
<p>授業計画 (30回)</p> <p>学生の個別研究</p> <p>研究プロセスにおけるレポート作成・発表・討論を継続し、研究を進める。</p> <p>1-2 研究計画の審査を経て、研究倫理審査承認を得て、研究計画に沿って研究の実施準備</p> <p>3-6 研究の精度を保つ方法でデータを収集</p> <p>7-11 効率的なデータ入力方法、適切なデータ分析方法によって、研究結果について信頼性と妥当性を検討して図、表を加えて文章化</p> <p>12-16 研究結果に基づいて、副論文について適切な考察と結論を導き論理的にまとめ</p> <p>17-23 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討</p>

24-25 「中間発表会 I」において適切な準備の上で発表・討論				
26-28 論文の発表会の評価に基づいて論文の修正				
29-30 論文を学術誌に投稿する準備				
評価方法				
課題についてプレゼンテーション50%、討議・ディベート50%				
評価基準				
研究の推進、データの収集・分析、データ分析内容に即した論文の作成、学会発表、学内中間発表の発表内容の精度、内容、評価				
A (100～80 点) : 到達目標に達している (Very Good)				
B (79～70 点) : 到達目標に達しているが不十分な点がある (Good)				
C (69～60 点) : 到達目標の最低限は満たしている (Pass)				
D (60 点未満) : 到達目標の最低限を満たしていない (Failure)				
到達目標	A	B	C	D
1. 博士論文研究計画書審査に合格することができる。				
2. 研究倫理審査申請書の提出ができる。				
3. 研究計画に沿って精度を保つ方法でデータが収集できる。				
4. 適切なデータ分析方法によって研究結果の信頼性と妥当性を検討できる。				
5. 分析に基づいて研究目的から結果・考察を適切に導くことができる。				
6. 博士論文中間発表会 I で発表し、質疑に適切に対応できる。				
7. 国際学会等において発表する準備ができる。				
8. 副論文の学術誌投稿を目指して研究を進めることができる。				

授業コード	授業科目名	配当学年/学期	単位数
DF9301	助産学特別研究 DⅢ	3年/通年	2
担当教員		課程	
杉下佳文		博士後期課程	

授業計画詳細				
授業目的				
<p>本特別研究DⅢは、助産学の質保証をめざし、看護活動の改善・改革のための先進的な課題で実践的研究に取り組む分野である。国内外で研究を広げ革新的なケアプログラムの開発やケアシステムの開発などを行う。またグローバルな視点による研究によって専門的で高度な実践と研究の相互発展を促進させる研究者や看護教育者になることを目指す。独創性があり先駆的な博士論文としてまとめることができる。</p>				
授業内容				
<p>助産学における特別研究DⅡの研究経過に基づいて、研究結果をまとめ、適切な考察と結論を導き論文をまとめる。研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討、博士（看護学）論文発表会後、論文の修正をし、学会誌に投稿する。具体的には、臨床研究のケア評価などから、科学的なエビデンスに基づき看護の問題や関連する施策の改善に寄与し、研究結果から、汎用可能で、かつ、教育的にも有用な研究成果を期待できる研究方法ができるようにする。そして、学生が周産期の研究結果から、理論を用いた検証方法を学ぶことで、さらに自己の研究を深められるようにする。</p>				
留意事項				
<p>1. 現場志向型研究の過程と方法を修得する。2. 論理的・分析的思考に基づいた論文作成 3. 期日までに論文を仕上げる</p>				
教材				
<ul style="list-style-type: none"> ・学生は自己の研究課題に関連した文献を教員の支援により、検索する。 ・教員は必要に応じて、研究テキスト、研究論文、資料を紹介する。 				
授業計画（30回）				
<p>1-6 特別研究DⅡの研究経過に基づいてさらに研究結果を見直し、適切な考察と結論を記述 7-14 研究目的から結論までの論旨一貫性と信頼性・妥当性を検討 15-16 「中間発表会Ⅱ」において適切な準備の上で発表・討論 17-20 発表した論文の評価に基づいて修正 21-30 博士論文としてまとめ、「最終発表会」で発表</p>				
評価方法				
課題についてプレゼンテーション50%、討議・ディベート50%				
評価基準				
<p>独創性があり先駆的な原著論文を作成する。</p> <p>A (100～80点)：到達目標に達している (Very Good) B (79～70点)：到達目標に達しているが不十分な点がある (Good) C (69～60点)：到達目標の最低限は満たしている (Pass) D (60点未満)：到達目標の最低限を満たしていない (Failure)</p>				
到達目標	A	B	C	D
1. 博士論文の作成に向けて研究を進めることができる。				
2. 学術集会への発表など研究成果を報告することができる。				
3. 研究成果として独創性・新規性・社会的価値について述べるすることができる。				
4. 独立した研究者としての能力を備え、幅広く深い知識を基盤としたさらなる研究を展開することができる。				

